

# 古典学派の経済的自由の制度

—— スミスからリカードへ ——

井 上 次 郎

## 一 序 辞

古典学派の特徴の一つは、その唱導するところの経済的自由の制度にあるといわれている。経済的自由の制度を翹望することは、古典学派にとつては、たしかに始祖アダム・スミス以来の伝統である。

古典学派といつても、これに属する一連の学者は、凡ゆる問題に亘つて、一様の主張を把持しておつたわけでは決してない。彼等の間にも、到底相容れない見解の相違もあれば、熾烈な論争も展開されてあつた。また、彼等の政治的立場もはなはだ異なるものがあつた。だが、それにも拘らず、彼等は、基本的な問題においては共通な原理、共通な意識を有し、また、経済的改革については共通な利害関係をもつておつた。ここに問題とすると、ころの経済的自由の高唱の如きは、その最も顯著なものゝ一つである。それは、当に、始祖スミス以来の伝統と称すべきものであつて連綿と継続せる諸学者の学説を貫通し、従つてまた、該学派の全構築を支える支柱たる役

割を果しているところのものである。

その意味において、古典学派の学説を解明する秘鑰の一つは、この主張を究めることによつて覓められ得ると考えられる。

それでは、彼等の経済的自由の主張は、一体如何なる内容のものであるか。又、この主張は、いかにして生成し、発展し、醇化したか。

小論は、これ等の問題を、該学派の始祖アダム・スミスとその完成者と目されるデヴィッド・リカアドの論著について検討してみたいと思う。

## 二 古典学派の経済活動の目標

古典学派の経済学者にとつて、経済活動を指導すべき窮極の目標、乃至はそれが成否を判定すべき最終の規準は、一体、何であつたか。一言にして表現すれば、それは『消費』（Consumption）であつた。

同学派の始祖アダム・スミスが重商主義に痛撃を加えたかの有名な章句の中の

「消費が総ての生産の唯一の目標であり目的である。従つて、生産者の利益は、消費者の利益を増進するために必要であり得る限りにおいてのみ、考慮が払わる可きものである。如上の公理は、これを証明せんと試みることの馬鹿馬鹿しいほど全く自明な事柄である。だが、重商学派においては、消費者の利益は殆んど常に生産者の利益のために犠牲に供せられ、かくして、生産が、消費ではなく生産が、凡ゆる産業及び商業の窮極の目標であると考うるものゝ如くである。」<sup>1)</sup>

という立言は、彼の、従つてまた古典学派の立場を、端的に表明したものである。

更にまた、われわれは、該学派のこの立場を明確に解説せるものとして、デニムス・ミルの次の言葉を、挙げる事ができるであらう。

「経済学 Political Economy の主題を形づくる生産、分配、交換及び消費の四種の行為のうち、初めのほうの三つのものは、手段である。誰人と雖も、生産するだけのために、物をつくる者はない。分配も、同様に、分配のために行われるのではない。財貨は、何等かの目標のために、分配され、また交換される。

その目標は消費である。」

そこで、L・ロビンズは、古典学派経済学者の経済活動の目標が消費に在ること以上に明瞭なものはありません。いたろうとなし、これに関連して、彼は次のような注意を与えている。<sup>3)</sup>

第一に、アダム・スミスならびにその後継者達は、生産者の利益をば生産者の利益として助長するものについては、いかなるものであれ、はつきりと反対した。蓋し、それは必ずや階級の特権を伴い、従つて社会全体にとつて有害となると考えたからである。

第二に、古典学派のいうところの消費は、常に現在のみならず、将来の消費をも含む概念である。消費を経済活動の目標となすことは、生産力の創造の望ましいことを閑却せるものだという非難が、往々古典学派の経済学者に対して浴びせられてきた。だが、彼等の多くが蓄積の重要性を強調したことに鑑みても、彼等が生産力の増大の重要なことを考えなかつたと推量することは誤解に基づくもの、ように思われる。生産的消費と不生産的消費との区別は、当にこのことを強調するために、考えられたものであつた。

第三に、古典学派の消費は、その利益が彼等だけに限定されるところの私人の消費だけを意味するのではなく、防衛のような国家活動の消費、公共的消費をも意味するのである。

第四に、この消費は、国民国家という限定された社会の構成員の消費であつたことを知らなければならぬ。

古典学派の諸学者が経済活動の窮極の目標として選んだものは、かような内容を有する消費であつた。そうして、この目的を達成するために、彼等が推奨した制度は、すなわち経済的自由の制度 the System of Economic Freedom であつた。それでは、経済的自由の制度とはいかなるものであつたか。

それは、法と秩序の一定の枠とならびに若干の必要な政府活動との下において、消費者は自己の最も好むところのものを自由に購入し、生産者（生産手段の所有者及び組織者もしくは労働者）は最大の報酬をもたらすと判断する方法に於て自己の財産なり労働力なりを自由に使用するところの、自発的協力の制度である、と云い得る。<sup>4)</sup>

古典学派の諸学者の信ずるところに抛ると、かような機構を通すことによつて、はじめて各人の利害が調節され、融合され、経済活動の目的が最もよく達成されることになる。

古典学派の経済的自由の制度は、決して放恣な、無制約な自由の制度ではなく、右に述べたように、それは一定の法や秩序と若干の政府活動を前提とした上での自発的協力の制度であつて、古典学派の諸学者がこの制度を奨揚して止まないのは、二重の基礎の上に立つ彼等の信念に基ずくものである。すなわち、消費者にとつては選択の自由が望ましいことであるという信念と、この選択に應ずるためには、生産者の方でも自由であることが能率的であるという信念、が是である。<sup>6)</sup> これ等の信念は、それぞれ、自由がいかに望ましいものであるかを示す積極面と、それに代わるところのものがいかに劣るものであるかを明らかにする消極面とをもつてゐる。

- (1) Adam Smith, *Wealth of Nations*, Cannan's edition, Vol. II, p. 159.
- (2) James Mill, *Elements of Political Economy*, 3rd edition, p. 219.
- (3) Lionel Robbins, *The Theory of Economic Policy in English Classical Political Economy*, London, 1952, pp. 7-11.
- (4) *Ibid.*, p. 11.
- (5) *Ibid.*, p. 12.

### 三 アダム・スミスの主張

周知の如く、アダム・スミスは、商品の価格を自然価格 *natural price* と市場価格 *market price* にわける。「いかなる商品の価格も、その商品を産出し、製造し、市場に搬入することに使用されるころの土地の地代、労働の賃銀及び資本の利潤を、それらの自然率に随つて支払うに足る額より、多くもなければ寡くもないとすれば、その場合はその商品はその自然価格と呼ばれ得る価格で売却されることになる。」<sup>1)</sup>

これに対し、

「商品の如何を問わず通例売却されるころのその実際の価格は、その市場価格と呼ばれるころのものである。それは、その商品の自然価格より高いこともあり得るし、低いこともあり得るし、また正しくそれに等しいこともあり得る。」

各特定商品の市場価格は、実際に市場に提供される商品の数量と、その商品の自然価格、すなわち、それを市場に提供するために支払われなければならないところの地代、労働及び利潤の全価値を悦んで支弁する人達の需要との間の割合によつて規定される。<sup>2)</sup>」

彼に抛ると、各社会、各地域においては、労働及び資本の各種の用途に、一つにはその社会の一般的事情によつて、一つには各用途の特性によつて自然に規定されるところの、賃銀及び利潤の普通率または平均率なるものがある。同様にまた、各社会、各地域の地代についても、その土地の所在する社会の一般的事情とその土地の肥沃性によつて規定されるところの、地代の普通率または平均率なるものがある。これ等の普通率または平均率が、すなわち、その時と処における、賃銀、利潤及び地代の自然率 *natural rate* である。

ところで、現実の取引価格である市場価格は、右に述べたように、必ずしも自然価格に一致するとは限らない。場合によつては、自然価格以下に降ることもあり得る。だが、市場価格は、久しきに亘つて、その自然価格以下にとどまり得ないものである。故に、自然価格は、最低の価格ではないにしろ、一定の期間に亘つて観る場合、消費者が継続して購入し得るところの最低の価格であるといふことができる。従つて、消費者にとつて、最も利益となる価格である。

市場価格なるものは、その特定商品の供給量とその商品に対する有効需要 *effective demand* との関係から、現実には市場において定まる価格である。だから、商品の供給量が有効需要を充すに足りない場合は、その商品の市場価格は自然価格以上に騰貴し、反対に、商品の供給量が有効需要を超過する場合は、その商品の市場価格は自然価格以下に下降することになる。

「市場にもたらされる数量が丁度有効需要を充すだけの数量で剩りを生じない場合は、市場価格は自ずと自然価格に正しく一致することになるか、もしくは判断され得る限りこれに近いものとなる。市場に在るところのその商品の全供給量は、この価格でもつて販売され得るのであつて、これより高い価格で売捌くことの出来るもの

ではない。各商人の競争は、彼等の総てをしてこの価格を受取らしめるが、これ以下の価格を受取ることを已むなからしめるものではない。<sup>3)</sup>」

ところで、スミスは、競争の自由の保障されているところでは、商品の供給量は自然と有効需要に適合・合致することになるものと観る。なぜか。

市場に提供される数量が有効需要を超過する場合は、価格は下落する。従つて、商品価格の構成部分の或るものは、その自然率以下で支払われなければならないことになる。このことが、地主というか、労働者というか、はたまた資本家を駆りたて、土地か、労働か、または資本の一部分を、この用途から撤回させるに至るであろう。その結果は、商品の供給量の減少となつて、やがてその供給量は有効需要を充して過不足のないものとなり、全価格は自然価格の程度にまで回復することとなるであろう。

もし又、供給量が有効需要に不足する時は、右の場合とは逆に、価格が騰貴し、価格の構成部分の或るものはその自然率以上に上昇することゝなつて、一層多くの土地というか、労働というか、あるいは資本をこの用途に導き入れ、かくして市場に搬入される商品の数量は間もなく有効需要を充すに足るものとなり、その価格の凡ての構成部分もその自然率に下落し、全価格はその自然価格に下降することとなるであろう。

所詮は、

「いかなる商品でも、これを市場に提供するために、その土地なり、労働なり、もしくは資本なりを使用するところの総ての人達にとつては、その数量が決して有効需要を超過しないことがその利益であり、又、その数量がその需要に不足しないことが、凡ての他の人々の利益である」<sup>4)</sup>、

からである。従つて、自然価格はまた、生産に携る人達にとつても、その仕事の安定と継続とを保障する価格であるといふことができる。

いうまでもなく、かゝる結果、すなわち、商品の供給量と有効需要との適合、従つて又その市場価格の自然価格への落着という結果が發現するためには、競争の自由ということが前提とならなければならない。そもそも、スマスは、人間性に遍在する自利心 *self-interest* に絶大な信頼を置き、人間は自己の利益を追求して経済活動をなすものなるがゆえに、競争が自由に行われる場合は、各人のこの努力の綜合が当然に右の結果を導くものと観る。競争を制限することは、かゝる効果の發現を阻止することゝなるわけであつて、従つて、スマスにとつては、如上の利益の実現は、競争の自由を確保するか否かに懸ることになる。彼が、何にもまして競争の自由、経済的自由の制度を要請して已まなかつたのは、これがためである。

スマスに拠れば完全な自由競争が、最も合自然的で、また最も合理的なものである。これによつて、はじめて、個人と社会の経済の健全な發展を企図し得ることになる。人は自己の利益を計らんとする性情を生まれながらにしてもつている。これが、自利心であり、『自愛心』(*self-love*)であり、『自己の状態を改善せんとする各個人の自然的努力』(*the natural effort of every individual to better his own condition*) でもある。だから自由な活動を保障することは、人々の創意、工風、勉勵を促すことゝなつて、消費者に対して低廉にして且つ良質の商品を供給することゝなるばかりではなく、社会全体に対しても人と物とを有効、適切に利用させる結果になる。

スマスは、本来、自然的なものとは総て善なるものであるなし、各人をしてその好むところに従つて自由に活動

させるならば、自己の境遇を改善せんとする自然の衝動によつて、各自の利益と幸福に向つて進ませることゝなると共に、その深謀・遠慮は、社会に對してもまた如上の好結果をもたらすものであると考へる。而も、各自の進むべき道、為すべき事は、自身が最もよく弁えているから、その選択、決定は須く当の本人に委ねべきであつて他から強制することは、弊害のみ多く、利益ではないと信ずる。すなわち、彼は、いう。

「各個人は、その支配し得る資本につき最も有利な用途を看出さんがために、絶えず努力している。彼の目指すところのものは、実に、彼自身の利益であつて、社会の利益ではない。併しながら、彼自身の利益の探究は、自然に、或は寧ろ必然に、彼を導いて社会にとつて最も有利な用途を選ばせることになる」<sup>6)</sup>

「自己の資本を使用することができ、そうしてその生産物が最大の価値のものとなると思はれる内国産業は、いかなる種類のものであるかといふことは、各個人がいづれの政治家や立法家が彼等のために為し得るよりもはるかに良くその地方の情況に應じて判断し得ることは、瞭らかなことである。いかにその資本を運用すべきかを私人に指令せんと企てる政治家は、自ら求めて最も不必要な注意を背負込むことゝなるばかりではなく、たとえ誰人であろうと個人に對してはいわすもがな、いかなる議會や元老院に對しても、安じては任すことのできないところの、そうしてまた、自分こそはこれが行使に適していると自惚れるような迂愚僭越な人間の掌中にあるほど危険なものはどこにもないであろうところの権力を、かすめ取るものである」<sup>7)</sup>

かくして、特惠または制限を事とする一切の制度が完全に撤去されると、自然的自由の明白且つ單純な制度が自ずと樹立されることになる。各人は、正義の法則を侵害しない限り、随意に自己の利益を追求し、かくして、自己の勤勞及び資本を以て他の何人とも競争する自由を完全に与えられると共に、国家もまた、かゝる体制の下

においては、適当に遂行することのできない産業指導の任務から免れ得ることになる。茲に『自然的自由（natural liberty）』というのは、個人の活動をば自由に放任し、国家又は社会はこれに対して作為を施すことなく、個人の目的追求をば人為的に制御しない自然的状态に置くことを意味する。スミスが、特許会社及び同業組合の排他的特権、徒弟条令、移住制限法、各種の奨励金、補助金、奨学金制度等を痛撃したのは、これがためであつた。彼にとつては、これ等のものは、競争を不当に阻み、もしくは不当に煽ることによつて、上述の効果の発生を妨碍し、社会経済に不利をもたらすところのものであつた。

かようにして、スミスの観るところでは、国家やその他の団体は、個人の活動を指導したり、監視したりする必要はない。国家の干渉は、経済活動の促進のためのものであらうと、抑制のためのものであらうと、普通の状態の下においては、有害無益である。それは要するに、経済の運行を自然的な軌道から外らし、その進路を阻碍し、効果を減殺するだけである。ゆえに、国家が経済に干渉することは、不自然であると共に余計なことである。

抑も、スミスに依ると、国家の職能は、国家そのものゝ本質上大いに限定されているのであつて、その職能に属せざるものは、総て各個人の自由な活動に委ねらるべきものである。

それでは、国家の爲すべきことは何か。

彼は、三つのものを挙げる。

第一は、社会をば他の独立の社会からの不法と侵害とから保護することである。

第二は、社会内の各成員をば他の成員の不正や迫害から保護することである。

第三は、個人または少数の個人の団体の事業としては到底收支相償わないような、ある種の公共事業及び公共施設を創設し且つ維持することである。

すなわち、國家の主たる責務は、謂れない他國の攻撃から國を衛り、不正を拉ぎ、正義を伸ばすことにあるのであつて、高處から個人の經濟活動を指導し、統制すべきものではない。いな、仮にこれを為さんと企て、も國家にとつて、それは寧ろ不可能なことである。國家が國防及び司法以上の仕事をなすにしても、それは、せいふ、各個人の希望するところではあるけれど、個人や少数の個人の団体では經費を償ふことのできない公共事業及び施設の創設、維持に止むべきものである。この場合は、元々、個人の希望に隨うところのものであり、従つて、國家の事業として為されるのではあるけれど、それは、個人の目的と矛盾するところの、もしくは個人の目的以上に出るところの、國家自身の目的を遂行せんがためのもものでは決してないわけである。

- (1) Adam Smith, *Wealth of Nations*, Cannan's edition. Vol. I, P. 57.
- (2) *Ibid.*, Vol. I, P. 58.
- (3) *Ibid.*, Vol. I, P. 59.
- (4) *Ibid.*, Vol. I, P. 59.
- (5) *Ibid.*, Vol. II, p. 43, P. 172.
- (6) *Ibid.*, Vol. I, P. 419.
- (7) *Ibid.*, Vol. I, P. 421.

#### 四 デヴィッド・リカードの主張

デヴィッド・リカアドオはアダム・スミスに始まつた古典学派の最高峰に位する学者であつて、同学派の経済学は、彼によつて完成されたものと観て差支えないであらう。尤も、リカアドオは古典学派の伝統に棹さず学者であるが、彼の経済学をスミスの夫れと比較すると、研究の形式において、また内容において、可なり顕著な相違のあることを知らなければならぬ。

スミスの経済学は、その著書の標題から明らかに窺われるように、国富の『本質』と『原因』とを究明する経済学であつた。リカアドオが、経済学を中心課題とするところのものは、これとは異なる。彼は、その主著、『経済学及び租税の諸原理』の序文において、次のように言う。

「土地の生産物——労働と機械と資本との結合投下によつて、地表から獲られる総てのものは、社会の三つの階級の間に分たれる。すなわち、土地の所有者、耕作に必要な蓄財もしくは資本の所有者、その労力に依つて土地の耕される労働者、が是である。

併し乍ら、社会發達の異なる段階において、地代、利潤及び賃銀の名称の下に、これ等の階級の各々に割当てられる土地の全産物の比率は、甚しく相違するであらう。而して、それは主として、土壤の現豊度、資本の蓄積と人口及び農業に用いられる熟練と工風と用具とに依存するであらう。

この分配を規定するところの諸法則を決定することが、経済学の主要課題であつて、チュルゴオ、ステュアアト、スミス、セイ、シスモンディ其の他の著作によつて斯学の進歩が著しかつたにも拘らず、地代、利潤及び賃銀の自然的行程に關して、それ等の著書が吾々に教えるところの甚だ尠いことは遺憾である。」

すなわち、リカアドオ経済学の主要な研究題目は、スミスの夫れとは異り、分配の問題であつた。

尤も、一口に分配問題の研究といつても、これを二つに分けることができる。一つは価値の分配についての研究であり、他は富の分配についての研究である。また一方を形式的分配問題の研究というならば、他方を實質的分配問題の研究と呼んでもよいであろう。前者の研究は労働者、資本家及び地主の三階級の相對的經濟關係を明らかにすることを目的とするものであり、後者の研究はこれ等の三階級の各々について其の絶對的境遇を左右する事情を窺ふることを目的とするものである。

リカアドオの意圖が兩研究の孰れに重点を置くものであつたかは、前掲の序文では、さだかでない。事實、リカアドオの著書にはこの二つの研究が混在し、見様によつてはそれがリカアドオ經濟學の特色だとも云い得るのである。だが、それは兎もあれ、リカアドオにより、彼の先師アダム・スミスの樂きあげた經濟學がその焦点を生産の問題、富の生成の問題から分配の問題へと移されることになり、かくして、分配の問題が理論經濟學における主要課題たらしめられることゝなつた。

かように、アダム・スミスの經濟學とリカアドオの經濟學とはその研究の形式や内容を異にするものではあるけれど、經濟的自由の制度を要望する点においては、兩者の間に聊の相違もないのである。自由を希求する熱意も、リカアドオはスミスに比べて、おさおさ劣るものではない。いな、古典學派の傳統を通じ、經濟的自由の主張が首尾一貫せる結構と透徹せる理論の裏附をもつて表明せるものは、リカアドオに如くものはない。

リカアドオに拠ると、經濟の自由、交易の自由は、財貨の數量の増加を來たし、その結果としての財貨の豊富と低廉とは消費者にとつてまことに有利なものであると共に、それはまた社會の一般的利益を高めることにもなる。

リカアドオは、社会の変遷につれて、地代、利潤及び賃銀が如何なる運動を示すかについて、仔細に吟味する。彼は、その謂ゆる人口原理と地代理論とを縦横に駆使し、地代、利潤及び賃銀の自然的行程に關して詳細な考覈を加える。かようにして、彼は、社会發展の必然の過程を、経済社会の辿るべき運命を、剔抉せんとする。その理論の詳細な紹介は、既に發表した拙稿に譲ることとし、彼の到達し得た結論を掲げると、次の如くである。

国内經濟を自由に放任するにしても、歲月の経過は、地代、利潤及び賃銀をして自ずと左の徑路を辿ることを余儀なくする。

先ず、地代である。

リカアドオは、地代の發生と騰貴とを、次の如くに観る。

「豊饒肥沃な土地が豊富に存在し、現存の人口を養うためにはその土地のホンの一小部分を耕耘することを以て足るか、もしくはその住民の支配し得る資本をもつてしては實際にホンの一小部分しか耕作し得ない国に最初の植民が行われる場合には、地代は存しない。というのは未だ何人によつても占有せられず、従つて又、それを耕作せんと欲する人の意のままになる土地が豊富に存在する場合には、誰も土地の使用に対して代償を支払わないであらうから。」<sup>c2)</sup>

ところが、人口が増加し、より劣等な土地に耕作が拡張されるに及んで、穀価が騰貴し、従つて又、地代の發生を見ることになる。すなわち、二つの等量の資本と労働を投下することに依つて獲られる收穫の差額が地代となるのである。ゆえに、もし、豊饒にして便利な位置を占めている土地が無限に存在するか、或は資本及び労働

が旧土地にたいして些の減收をも見ることなしに無制限に投下されることが可能であるならば、地代の發生も、地代の騰貴もあり得る筈がない。ところで、實際においては、土地は、有限にして、品質に差等あり、位置の如何によつて大いに利便を異にしている。また、土地には收穫遞減の法則が作用する。リカアドオは地代の發生と騰貴の原因をここに覓める。

だから、富の増進と人口の増加は、他の事情にして變化のない限り、耕地の擴張を不可避とするから、その必然的結果は、穀価の騰貴と地代の上昇にならざるを得ない。社会の發展は、一国の富と人口を増進せしめるものである限り、地代の自然的行程は、上昇の傾向を辿るものと觀なければならぬ。尤も、リカアドオの理論では、交換価値を決定するものは限界生産物であり、限界生産物の生産には地代の支弁を要しないものであるから、価値は利潤と賃銀の二つの部分に分れ、また二つの部分にのみ分れることとなる訳である。併し乍ら、限界生産費と個別生産費との差額が地代となるものであつて、そして、この限界土地の生産物の生産に必要な労働量、すなわち最大労働量が交換価値を規定するものであつて、且つより劣等な土地に耕作が擴張されることによつて土地の生産物の交換価値が上騰する時は地代もこれにつれて増大する關係にあるのであるから、地代は、価値の中から支払われるものではないが、価値を標準として支払われるものだとすることになる。従つて、地代というものは価値に対して比例をもち、社会が進展し、穀物の価値が騰貴する時は、地代もこれに比例して上昇すると云い得る。而して、この場合は、地代を收得する地主にとつては、二重に利益となる。すなわち、第一に、地代として收得する分前が増大し、第二に、その收得物の一単位は前よりも、より大なる數量の他の財貨を支配し得ることになる。かくして、彼は、名実俱に利得することになる。

この地代の自然的行程からまた彼の労働の賃銀の自然的傾向が容易に推測され得ることになる。

彼は、賃銀、すなわち、労働に対する価格を、自然価格と市場価格とに分ける。前者は労働者をしてその生活を維持し増減なくその種族を永續させるに必要な価格であり、後者は需要にたいする供給の自然的作用に由て労働にたいして実際に支払われる価格である。ゆえに、賃銀の騰落は、次の二つの原因に基くことになる。一つは、労働の賃銀が費消される諸財貨の価格、なかんずく、食物の価格であり、他は、労働者の供給と需要である。

ところで、労働の自然価格は、社会の進歩につれて、常に騰貴する傾向をもっている。というのは、その自然価格を左右する主たる財貨たる食物の生産が困難となつて、次第にその価格が上騰する傾向があるからである。

市場において労働に対して実際に支払われる価格たる市場価格についていうならば、労働は稀少な時に高価で、豊富な時に低廉である。だが、リカアドオによると、労働の市場価格がその自然価格から如何に外れようとも、他の諸財貨と同様に、結局はその自然価格に一致せんとする傾向を有するものである。

リカアドオに依ると、労働の市場価格の自然価格からの乖離は、資本の蓄積の速度、労働雇傭手段の蓄積の速度の遅速によるものである。この速度は文化の高い国から技術と智識とを移入する新植民地において、最も大である。従つて、かかる地域においては、もし労働者の缺乏が人口稠密な国の住民によつて補足されないならば、労働の価格を著しく騰貴せしめ、労働の市場価格はその自然価格より遙に上昇し得ることになる。だが、人口が多くなつて、耕作が品質の劣つている農地に拡張されるに及んで、この資本増加の速度は鈍つてくる。かくして、總て労働の市場価格はその自然価格に略一致することになる。そうであれば、開拓後既に久しい歳月を経ている国々においては、他の事情にして変化のない限り、労働の賃銀は、一般に、増加の傾向にあると観てよい。人口

の増加につれ、労働賃銀の費消される主たる財貨である食物の生産により多くの労働を要することゝなつて、食物の価格は不断に騰貴するからである。かように、賃銀の自然的傾向は、地代と同様に、騰貴にある。だが、賃銀の騰貴と地代の騰貴との間には、本質的な差異のあることを知らなければならぬ。賃銀の場合は、賃銀全体としての上騰の割合は、穀物の騰貴に及ばない。というのは、労働者はその労働の代償として貨幣を受取るのであるが、その貨幣を悉く食物の購入にのみ充てるのではない。その貨幣のある部分を労働者自身とその家族の生活に用な他の財貨の購買に使用する。食物の価格が騰貴する場合は、労働者とその家族の費消する数量の食物の価格騰貴の程度だけ労働者の受領する貨幣賃銀は上昇することになるが、事実かような場合には、労働者がその生活を支えるために購入・消費する他の財貨と雖も土地の原生産物が其の財貨の構成に入り込むものは其の程度に依つて等しく価格が上騰する筈である。従つて、同額の貨幣をもつては、もはや以前と同じ数量の財貨を手し得ないことになる。だから、食物の価格が騰貴する場合は、労働者の貨幣賃銀は上昇するにも拘らず、すなわち、価値の分前は増加するにも拘らず、その賃銀で支配し得る財貨の数量は逆に減少し、その境遇は悪化せざるを得ないことになる。

それでは、資本の利潤はどうか。

財貨の価値は、その財貨の生産に必要な労働量によつて定まり、而して、その価値は二つの部分に分れ、一つは労働の賃銀となり、他は資本の利潤となす以上、その理論の必然的結果として、賃銀の騰貴は利潤の下落となり、賃銀の下落は利潤の騰貴となるわけである。ところで、曩に一瞥したように、社会の発展につれ、食物の追加量はますます多量の労働を犠牲にすることなくして取得され得ないものであり、従つて、賃銀は次第に

騰貴することになるとなす以上、利潤の自然的傾向が下落にあることは、これまたリカアドオの理論的帰結として承認されるものと謂わなければならない。この場合、資本家の收得分は、価値の点においても、将又、数量の点においても、減少に減少を重ねてゆくことになる。

之を要するに、リカアドオの理論は、社会の発展による富の蓄積、人口の増加は、たとえ国内経済を自由に放任するとも、農耕用の機械の発明、農業上の改良、海外の新市場の発見が行われない限り、地代は名実俱に上騰し、労働の賃銀は名目賃銀は上昇するも実質賃銀は低落し、資本の利潤に至つては名実共に下落の一途を辿るを余儀なくしめることを明らかにするものである。

利潤低下の極限は、論理的にいう限り、土地の生産物の中から地代を控除した残余の全部を賃銀が蠶食する秋である。この場合は、資本の利潤は皆無となる。従つて、資本の蓄積は終熄を告げ、追加労働は全く需要されることなく、労働の実質賃銀は労働者が生存を維持する最低限まで押し下げられ、人口は飽和点に達し、社会は停顿静止の状態に陥らざるを得なくなる。

事実はその遙か以前に資本蓄積の動機がなくなつてゐる筈である。蓄積の動機は、これを生産に使用して利潤を挙げるにある。従つて、蓄積に対する動機は、利潤が減少する度毎に減退し、資本を生産的に使用するについで必ずや遭遇しなければならない煩勞と危険とを充分に償い得ざる程度に利潤が低落すると、全く消滅するであらう。だから、利潤低下の限界は、論理的限界よりずっと高く、それだけ早く社会は静止の状態に到達することになる訳である。かくして、事實は、もつと早く、萎靡沈滞と惰性の支配する社会の到来となる。

リカアドオの経済学は、いわば、社会発展のこの必然の過程を追及する経済学である。彼は、その主著の殆ん

ど全巻を挙げて、この法則の冷静克明な探索に捧げている。彼は、そこにおいて、自然の成行に任す限り、社会の發展につれ、資本主義社会がその謂ゆる進歩の状態から静止の状態に辿りつく迄の過程を、避け難い命数として仔細に描写している。

だが、このことは、資本主義社会に清新の気を吹きこみ、その老衰を防ぐ方法の絶無であることを意味するものではない。「社会の自然的發達」(natural advance of society)の法則を明らかにすることは、必ずしも人爲による延命乃至甦生策を全く否定し去ることゝはならないからである。科学や医術の進歩が、人壽を延ばし、疾病を治癒して再び清新の氣をとり戻させ得るが如く、資本主義社会の沈滞萎縮を防ぎ、進歩と繁榮を持続あるいは促進させることも、不可能でないと、彼は考へる。

それでは、その対策は何か。

農作に關連を有する機械の發明、農業上の改良、海外の新市場の發見がこれである。ところで、前の二つは、科学や技術の問題である。經濟政策として取上ぐべきは、新市場を發見し、食物を低廉に入手する方途を講ずることである。彼が一身の情熱を傾け、穀物貿易の自由を熱心に提唱したのは、これがためであつた。

リカアドオによると、地主と社会の爾余の諸階級とは、利害が明白に対立する。食物價格の上昇は地代の騰貴を導き、地主はこれによつて利益を受けることになる。ところで、地代は食物獲得の困難と共に増大し、且つそれは悉く一般消費者の負担となるものであるから、地主と消費者の利害は全く相容れないものである。食物の騰貴は、労働者の境過を劣悪化し、また利潤を名実ともに削減する作用をなすものであるから、そこでまた、食物價格の騰貴を喜ぶ地主とこれを不利益とする労働者及び資本家とは、その利害が明白に対立することになる。

而も、地代は富の創造でなくて、富の移転に過ぎない。<sup>3)</sup>だから、地代を接收する地主階級は、社会に対して何等の寄与をもなすことなく、他の総ての人達を犠牲にすることによつて、富み且つ栄える者である。その意味において、リカアドオは、地主を反社会的存在であるとす。

ゆえに、彼によれば、地主の利益を削減することが、すなわち、社会の他の総ての階級の利益を増進する結果になる。

すなわち、外国から低廉な食物を輸入すれば、地代の低落となつて地主の不利益となるけれど、爾余の社会の総ての階級は、これによつて恩恵を受けることになる。低廉な食物の輸入が一般消費者の利益となることについては、贅言を要しない。食物の低廉化は、資本の所有者に対して、二重の利益を与える。利潤を高めると同時に、その支配する財貨の数量を大ならしめる。労働者に対しても、リカアドオの理論では、二様の理由から労働者の実質賃銀は引上げられ、彼等の境遇は好転することになるから、利益となる。すなわち、第一に、労働者の收得する貨幣は絶対額においては減少することになるけれど、その貨幣は彼等をしてより多量の生活の必需品、便宜品を購入することを可能ならしめ、第二に、同量の資本をもつてより多量の労働者を雇ふことを得させると共に、一般利潤率の上昇は一層大なる資本の蓄積を導き、かたがたもつて労働に対する需要を増大せしめるがゆえである。

本来、資本主義社会は資本に依存する社会である。資本は利潤を目的に投下されるものであるから、そこで、リカアドオは、低廉な食物の輸入によつて、利潤率が大となる時は、資本蓄積の速度も大となつて、資本主義は進歩發展の状態となり、以上の好結果が生まれることになると考える。彼によつて、この問題が、地主のためを

はかるか、それとも、爾余の社会の総ての階級のためをはかるか、という形において提案されているのは、これがためである。

之を要するに、リカアドオにおいては、低廉な食物の輸入は、消費者の利益を増進することは勿論であるが、この場合は、消費者の利益は生産に携る資本家及び労働者の利益と完全に融合・一致することになる。すなわち、これによつて、地主以外の社会の総ての階級の利益が、一様に高められる結果になる。階級的利害の融和、国民経済の利益の増進は、かくして、達成されることになる。彼は、政策の極致をここに究め、これこそは、経済政策として最高且つ最要のものとなすのである。リカアドオの経済的自由の制度はこれによつて完結されることになる。

- (1) 拙著、リカアドオ貿易論の研究。  
拙稿、リカアドオと経済政策（法と経済、第一〇八・一〇九号）。
- (2) 同、リカアドオ経済学の二大支柱（立命館大学、人文科学研究所紀要、第一号）参照。
- (3) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gonner's edition. p. 46.  
Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus. p. 128.

## 五 結 語

古典学派の創始者アダム・スミスも、又同学派の完成者と目されるデヴィッド・リカアドオも、俱に熱心に経済的自由の制度を唱導し、その実現を翹望している。

だが、南碩学の主張を比較すると、其の間に少からざる差異のあることは、注意されなければならない。スミ

スの論ずるところは、リカアドオに比較すれば、平板で且つ抽象的である。これに対し、リカアドオは、問題の核心は何であるかをつきとめ、これを放置するにおいては、いかに他の経済活動を自由にすればとて、その効果の虚しい所以を、経済社会の運動法則を闡明することから極力解明に勉める。その意味で、リカアドオの主張の方が、遙に、具象的であり、論理的であり、体系的であると云い得る。

もちろん、スミスにおいても、経済的自由の制度は決して単純な不干渉を意味するものでなく、妨害的・反社会的な障碍を除去し、個人の自由な創意、その持てる大いなる潜在力を発揚せしめるといふ、積極的な意図を有するものである。だが、これについて、何が最も肝要にして根本となるべきかの究明が、スミスにおいては、必ずしも充分になされていない。このことは、また、一面、彼の樂天主義に相通することになる。

スミスの経済学には、十八世紀啓蒙哲学に共通な、自然主義思想と樂天主義思想とが、その根本思想として混在していることは、既に学者によつて指摘されている。<sup>9)</sup>たとえば、「各人が自己の状態を改善せんとするところの一様にして不変な、そうして又、中断することのない努力、すなわち、国家や国民や私人の富裕が本源的に引出されるところのこの原理は、政府の浪費や行政上の最大過失が行われているにも拘らず、屢々、社会の改良に向つて進む自然的な發達を維持するに足るほど強力である。それは、恰も、動物の生命における未知の原理が、常に疾患ばかりではなく、医師が過つた処方をして、それにも拘らず、往々にして身体に健康と活力を恢復させることがあるのと、同様である。」と述べているが如きは、その表れといふべきである。

だからといつて、われわれは、スミスをもつて、形而上学的、神学的、予定調和説の信奉者となすものではない。スミスが時として神学的用語を用いることが、人々を誤解させる原因となつてはいるけれど、かゝる表現が彼

の議論の科学性を損うものでないことは、ニュートンの宇宙に関する神学的表現がその発見した自然の運動法則の妥当性を覆えすものでないと同断である<sup>3)</sup>。個人と個人との間の利益の調和といつても、無為に生ずるものではなく、スマスは、法と秩序との適当な枠の下におかれることにおいてのみ、市場の機構がその間の利害の調和をもたらすものと観るのであつて、従つて、彼の謂ゆる『見えざる手』(invisible hand)も、人間の努力とは無関係な神や自然力の手ではなく、それは公共の福祉と調和しない事態の発生する可能性を自利心追求の領域からとり除く立法者の手なのである。

これに対して、リカアドオの敘述は、著しく沈静であると共に、陰鬱である。彼は、その主著の殆んど全巻を挙げて、社会発展の必然の過程の追及にあてゝいる。彼は、資本主義社会が、進歩の状態から静止の状態へ、生成発展の状態から萎靡沈滞の状態に辿りつくことを、避け難い命数として、克明に、巨細に描写する。

従つて、両者の主張が、ともに経済的自由の制度を唱導するものでありながら、大いにその格調を異にしていることは、一つは、彼等の研究態度の相違にもとづくものだと思ふべきではない。同時に、時代の背景、歴史の変遷ということも、もう一つの原因をなしていることを看過してはならないと思ふ。

リカアドオがその主著「経済学及び租税の諸原理」の初版を公にしたのは、ナポレオン戦役の戦塵が漸く収まつた一八一七年のことである。スマスの「諸国民の富」の第一版が世に現れたのは一七七六年のことであるから、この間に四一年の歳月が流れているわけである。この四一年という期間は決して短くはない。この期間こそは、イギリス史上、全く類のない急スピードの進歩、改変の行われた時期である。この間に、イギリスは、大きく歴史を揺り動かした二つの大事件を経験している。産業革命とナポレオン戦役とが、是である。かようにして、リ

カアドオは、産業革命の暗い面とナポレオン戦役後の土地所有者と産業ブルジョアジーとの利害の対立・抗争を具に見聞することができてあつた。従つて、これが両者の主張の相違のもう一つの原因をなしていると観るべきであらう。

- (1) Gide and Rist, A History of Economic Doctrines, English translation. P. 68.
- (2) Adam Smith, Wealth of Nations, Connan's edition Vol. I, P. 325.
- (3) Lionel Robbins, The Theory of Economic Policy in English Classical Political Economy P. 24ff.
- (4) Ibid., P. 56.